

トーンの記録

(11) 編集局：あとがき

第2号

- (1) Col. Phraya Siiwisaanwaacaa : 総理大臣の公務遂行について
- (2) M. C. Suphattharadit Ditsakun : 13世紀以前の東南アジアの状態について
- (3) Prasoet na Nakhon : スコータイ 碑文研究報告
- (4) Khacoon Sukkhaphaanit : タイ史におけるヤソートーンおよびアンコールトムについて
- (5) Roong Sayaamanon : アユタヤ史
- (6) M. R. W. Saengsoon Kaseemsii : ラタナコーシン史
- (7) Chanthit Krasaesin : Ngoen Kham Pawm について
- (8) Trii Amaattayakun : ピチットにおける都跡調査
- (9) Chanthit Krasaesin : あとがき

(桂満希郎)

Kulaap Manlikamaat. *Khati chaoban*. Bangkok: Samakhom phaasaa lae nangsuu haeng prathet thai, B. E. 2509 (1966). v + 4 + 268 p.

Samakhom phaasaa lae nangsuu haeng prathet thai は国際 PEN クラブのタイ国支部であるうえに、1958年に設立されて以来、タイ語・タイ文学に関して出版・会合等をはじめとして様々な活動が続けてきているが、その他にも土着文芸 (wannakam doem) の研究をも目的としており、本書はその方面における研究成果として現われたもので、題名の *Khati chaoban* というのは “folklore” のタイ語訳に当てられている。全体は二つの部分にわかれ、第1部は *Khati chaoban* (folklore)、第2部は *nithan chaoban* (folktale) となっており、両者とも北は Chiang Rai から南は Nakhon Si Thammarat にいたるまでの各地域で著者自身が記録収集したものを集めている。

第1部では、folklore なるものの概念をヨーロ

ッパおよびアメリカで発達した方法論にもとづいて規定し、全部で13種類に分類し、それぞれの例が集められている。しかし、最初の説明の部分がやや不十分で、何にもとづいて本書の13種に分類したのかという点をはっきりしていないきらいがある。これに対して、第2部の folktale においては、その分類方法をかなり詳しく説明しているのだから、第1部よりずっと明瞭である。最初に地域による分類、形 (form) による分類、ついで Antti Aarne による Type Index および、Aarne-Thomson Types of Folktale について、その type index の例をあげながら説明する。最後に最も詳細な方法として Thompson による Motif Index of Folk Literature を説明し、その index の一部を例としてあげている。さらに実際に field で取材する場合の技術的方法を簡単にではあるがつけ加えていて、よくまとまったものとなっている。しかし、本書に集められた folktale の分類に用いられている方法は、index 方法ではなくて、形 (form) による分類である。これは本書に集められた folktale が合計38というあまり大きくない数を考えれば、もっともなことかもしれない。本書は folklore そのもの、あるいはその方法論を論じた研究書ではなく、各地で集めたものを一定の基準にもとづいて分類整理して提出した資料集と見るべきものである。

タイの folktale を集めた本は今までもかなり出ているが、主として地域別に収集したもので、内容的に見ると地名伝説から仏教本生譚に由来するものに至るまで雑然と1冊にまとめただけで、これといった明確な基準にしたがって分類整理したものは本書がはじめてではなかろうか。タイ国における folklore-folktale も地域によってはやがて間もなく消え去ろうとしているものもたくさんあるにちがいないが、また一方こういったものはいくら集めてもつきることのないものであるから、本書によって示されたような一定の方法で収集、分類、整理され記録されてゆくことが望まれる。この意味で、本書はその量はあまり多くないが、一つの手本、あるいは出発点となるものではなかろうか。

(桂満希郎)